

書評

John L. Brooke,
*Columbia Rising: Civil Life on the Upper Hudson
from the Revolution to the Age of Jackson*

(Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2010)

肥後本 芳 男

はじめに

『コロンビアの勃興 (*Columbia Rising*)』は、現在オハイオ州立大学で教授職を占める初期アメリカ史研究の重鎮ジョン・L・ブルック教授による最新の研究成果である。ブルック教授は、18世紀初めから19世紀半ばまでのマサチューセッツ州ウースターの政治文化の変容を論じた『コモンウェルスの中心 (*The Heart of the Commonwealth*)』で彗星のごとく学界に現れ、今日まで社会史的アプローチを政治文化史研究に組み込む手法で幾多の重要な著作・論文を刊行してきた。¹⁾ 初期アメリカ史研究の分野ではジャック・P・グリーン (Jack P. Greene)、ゴードン・S・ウッド (Gordon S. Wood)、ジョイス・アップルビー (Joyce Appleby) といった大御所を引き継ぐ世代の中でも第一人者といってよい。

本書は、プロローグ「革命時代の同意と市民社会」から始まり、第1部「革命の帰結」、第2部「帰結の拡大」、第3部「政治と排除」の3部構成をとっている。著者は、建国初期に新たに編成されたコロンビア郡の政治文化が18世紀末から19世紀初めの「ジャクソンの時代」の間にはどのような変貌を遂げたのかを、様々な統計指標に依拠し随所に興味深いエピソードを織り交ぜながら叙述する。豊富なデータと100頁を超える注を備え総頁数がほぼ600頁という圧巻の大著である。

1. 研究の視点とアプローチ

研究の対象は、ニューヨーク州北西部に位置し建国初期に組織された新興のコロンビア郡の政治文化史であり、米国の文化人類学者クリフォード・ギアーツ (Clifford Geertz) の言葉を借りれば、ハドソン川上流のコロンビア郡の変容過程の「厚い記述」ということになる。しかし、本書はよく見られるローカル・ヒストリーの詳細な事例研究とは一線

¹⁾ John L. Brooke, *The Heart of the Commonwealth: Society and Political Culture in Worcester County, Massachusetts, 1713-1861* (New York: Cambridge University Press, 1989); idem, *The Refined Fire: The Making of Mormon Cosmology, 1644-1844* (New York: Cambridge University Press, 1996). 前者は思想史の優れた研究書に与えられるマール・カーティ賞を受賞し、後者には米国史の分野で権威あるパンクロフト賞が授与されている。

を画す。それは、ハーバーマス (Jürgen Habermas) の「近代的公共圏」の理論やトクヴィルの自発的結社モデルを批判的に適用しつつ、革命以後19世紀初頭に出現したコロンビア郡における政治文化の様相を建国初期のアメリカ全土に広く当てはまる歴史プロセスと捉えているからである。²⁾ このように理論的に精緻で広い視点から描かれた本書のコロンビア郡の政治文化の歴史は、新旧の政治史をつなぐ意欲的な試みであり、単なるローカル・ヒストリーを超えた第一級の学術書に仕上がっているといえる。

いささか脱線するが、評者は大学院生の時分アメリカ独立革命史を主に研究し、革命時代の愛国派とロイヤリストの論争に興味を抱いていた。アメリカ植民地人が相対立した要因はいったい何だったのか、とりわけ敗者となったロイヤリストの立場からアメリカ革命を見直すことで従来の研究では看過されてきた独立革命の本質を捉えることができるのではないかと考えていた。そのようなとき、偶然ニューヨーク州の著名な王党派ピーター・ヴァン・シャーク (Peter Van Schaack) の日記やそれに関連した史料を目にする機会をえた。評者は、革命混乱期のヴァン・シャークの苦悩、追放、ロンドンへの亡命、故郷キンダーフックへの帰還などを辿りつつアメリカ革命期のロイヤリズムの一端に迫る論考を刊行したが、一つの課題を残していた。³⁾ それは、帰国後のヴァン・シャークが新生アメリカ合衆国の社会と文化にどのような反応を示したのか、アメリカ社会は彼をいかに受け入れたのだろうか、という問題に当時は史料的な制約から踏み込めなかった。今回ブルック教授の詳細な研究によって、建国期のハドソン渓谷の政治、社会の変化とヴァン・シャークが果たした役割について一部が明らかにされたことは実に喜ばしいことである。

独立革命から19世紀初頭の世紀転換期のハドソン川渓谷における主要な人物や事件に関するブルック教授の該博な知識は、驚くほど広範囲で精緻であるが、この書物は、一般読者は言うに及ばず多くのアメリカ研究者でも必ずしも読みやすいものではないだろう。この時代を専門にする評者でさえ、各章で取り上げられている数多くの登場人物名やローカルな地名・固有名詞、詳細で多彩なエピソードにときに圧倒されるほどであった。

そのような地方史の「マイクロ・ヒストリー」にも関わらず、本書の骨子は明瞭である。アメリカ独立革命以前にはハドソン川上流地域には公式の「(近代的) 公共圏」はほとんど存在しなかった。しかし、革命期とアメリカ共和国創成期に、互いに相争う二つの政治勢力—ブルック教授が「デモ (革命期の愛国・民衆派)」と「アリストロ (社会的エリート・貴族派)」と呼ぶところの二つの政治派閥—が台頭してくる。新国家の創始期に急増した新聞、雑誌、パンフレットなどの印刷媒体や自発的結社は、新しい市民社会の創出に大きく寄与した。つまり、政治においてより開かれた討議と説得によって人民の同意を得ることがまずもって要請される市民社会が形成されつつあった。こうした市民社会の台

²⁾ ブルック教授の公共圏に関する理論的枠組みを理解するうえで、次の論文が有用である。John L. Brooke, "Consent, Civil Society, and the Public Sphere in the Age of Revolution and the Early Republic," in Jeffrey L. Pasley, Andrew W. Robertson, and David Waldstreicher, eds., *Beyond the Founders: New Approaches to the Political History of the Early American Republic* (Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 2004), 207-50.

³⁾ 拙論「ピーター・ヴァン・シャークとアメリカ共和国—アメリカ独立革命におけるロイヤリズムの一考察」『アメリカ研究』第25号(1991年)、179-99頁。

頭は、エリートの寡頭勢力と民衆的な革命勢力の双方に挑戦し、ブルジョワ的な「立派さ (respectability)」、思慮深さ、向上心をもつ市民に支えられた新しい政治文化の基盤を敷いたのである。と同時に、新共和国において市民とは誰であり、誰が政治的国民として含まれ/排除されるのか、そもそもシティズンシップとは何を意味するのか、という問題が、1780年代の州憲法および連邦憲法作成時から19世紀を通して合衆国のきわめて重要な問題としてたびたび浮上し議会を超えた広い公共圏で激しい議論が戦わされた。

1836年に第8代合衆国大統領に選出されることになるマーチン・ヴァン・ビューレン (Martin Van Buren) がニューヨーク州北西部キンダーフック地区一後にコロンビア郡の北部に統合される地域一で幼少期を過ごしたのもちょうどこの政治文化の大きな移行期であり、本書の物語に埋め込まれた重要なプロットの一つとしてヴァン・ビューレンの成長と苦闘、さらに彼が指導的な役割を果たした19世紀初頭の合衆国における二大政党制の出現がある。

それでは、革命以前と以後の公共 (公的生活) を分けた重要な相違は何だったのだろうか。ブルック教授によれば、植民地の公共は無数の「孤立した民族・宗教的コミュニティ」から成り立っており、そこでは有力な地主家族からなる少数の地方エリートへの「恭順」を通して政治が行われ、コミュニティの秩序が維持されていた。この点で植民地の政治は、公開の討論や正式な審議過程など、今日的な民主主義の規範の手順とは無縁の、かなり排他的で私的領域にかかわる事柄であった。しかしながら、アメリカ革命の到来は、この伝統的な植民地政治のあり方に異議を申し立てる契機となった。印刷工、職人、商店主をはじめ、従来ほとんど政治と直接かかわりを持たなかったその他の「中間層 (middling sorts)」が革命委員会に参入し始め、すすんで民兵に加わった。そこで彼らは審議過程において重要な役割を果たすようになり、1800年には植民地時代の伝統的な「恭順の政治」は急速に退潮していった。コロンビア郡における「革命の帰結」で一時的な合意をみた政治は、19世紀初頭の広範で自由主義的な「公共圏」の出現とともに、政党が主導する自由主義的な利益政治へと変容することになる。ブルック教授は、この新しい政治文化の創出に重要な貢献を果たした人物としてコロンビア郡出身のヴァン・ビューレンを位置づけ、彼の地方政治から州政治、ひいては連邦政治への躍進を辿る。また同時に著者は、ヴァン・ビューレンを近代的な政党政治の立役者とみて、彼の政治信条の源流を探っている。

先述したように本書は極めて密度の高いローカル・ヒストリーであり、ここではそれを子細に紹介し検討する紙幅もない。以下、評者が疑問に感じた点や若干の批判点を中心にコメントを加えてゆきたい。

2. 初期アメリカ共和国における公的、私的領域の境界の変化

先行研究によれば、植民地時代の階層的な「恭順の政治 (deferential politics)」における公と私の区別は曖昧なままであった。コミュニティでは少数の名望家が繰り返し選挙で代表に選出された。政治は彼らのリーダーシップと賢明な判断に委ねられ、有徳な名望家の利害とコミュニティのそれは重ね合わされて見られていた。道路や橋、共同耕作地、港湾などの整備、現在では公共事業の管轄に入るものは、独立革命以前には社会的身分が高い地元の名望家や自治組織 (corporation) にもっぱら委ねられ、公共善の実現は社会的エリー

トの義務であり、私的な奉仕と同一視されていたのである。⁴⁾ また、植民地時代には政治議論は、総督や植民地の官吏を中心とした公権力によって注意深く監視されており、広く一般に公共の問題を議論する公開のフォーラムは未だ十分に発達していなかった。ところが、1760年代半ばに拡大した対英抵抗運動がしだいに急進化するにつれて、イギリス本国とアメリカ植民地の権力関係を巡って大陸大の議論の場が形成され始めた。

建国期には新聞、雑誌、自発的結社などの著しい急増によって、共和主義に根ざした近代的な公共圏の概念が誕生し、それは新国家の様々な政治イシューを巡って意見交換を行う言論空間へと結実した。こうした状況下で、伝統的な公私の権限の曖昧さも必然的に見直しを余儀なくされ、紙面を通じて政治の「腐敗」が厳しく追及された。90年代にはフェデラリスト派とジェファソン派の両陣営の新聞は、しばしば政治腐敗に言及して互いに激しい批判を繰り返すようになった。かくして新共和国の民衆は、19世紀初頭には伝統的な「恭順の政治」からしだいに離れて、亡命ロイヤリストの没収地の処分や土地所有権問題などを自らの生活にとってより身近で切実なイシューとみなすようになった。事実本書の統計データが裏づけるように1800年を境に市民の顕著な政治参加が見られたが、彼らの政治への関心を高め、党派対立を煽る働きをしたのが当時急増した新聞であった。

第7章においてブルック教授は、投票パターンの推移を示す入手可能な限りの統計データを縦横に駆使して、「不正投票の横行」を示唆する興味深いデータを示している。すなわち、1826年までニューヨーク州では(白人成人男子の)投票資格として財産あるいは納税要件が課せられていたにもかかわらず、多くの資格を満たさない者にも投票を促したと推測されるのである。実際、若きヴァン・ビューレンも当時フェデラリスト派による不正な投票操作を目の当たりにし、コロンビア郡における政治腐敗の危険を直接経験することになる。共和主義の影響がいまだ色濃く残っていた建国初期のアメリカでは、腐敗は共和主義の倫理観に真っ向から対立する忌むべきものだった。このような思想的枠組みの中でアメリカ人は、きわめて意識的に公と私の領域を峻別し始め、あらゆる私利私欲が公的領域に侵害するのを防ごうとした。事実、政治腐敗が新共和国の市民の間できわめて由々しき事態として問題視されるようになるのは、近代的な公共圏の出現プロセスと合致した。さらに、19世紀初頭にヴァン・ビューレンと彼が率いる派閥「バックテイルズ(Bucktails)」が、貴族的なフェデラリスト派による公私混同の利権政治を痛烈に批判し、後にディ・ウィット・クリントン(De Witt Clinton)の「ばらまき政治」を攻撃したのも、広く多様な市民を内包する近代的な「公共圏」においてであった。

従来歴史家はヴァン・ビューレンを、まずポスト革命世代の自由主義的な野心的政治家とみなし、次に近代的な政党システムの構築者として解釈してきた。彼は確かに地方政治と国政の双方で対立する利害を巧みに調整し、選挙区の得票を操縦することに長けていたし、党派を必要悪とみなし政党政治の基盤の確立に大きな手腕を発揮した。こうしたヴァン・ビューレンに関する従来解釈に加えて、ブルック教授は、最低限度の政府(ミニマムガヴァメント)という古い共和主義観に拘泥するヴァン・ビューレンの政治的保守主義

⁴⁾ この点について、次の研究書を参照のこと。Hendrik Hartog, *Public Property and Private Power: The Corporation of the City of New York in American Law, 1730-1870* (Ithaca: Cornell university Press, 1983), 62-68.

も同様に指摘する。長らく名望家が大きな影響力を及ぼしてきた故郷キンダーフックで貧しいオランダ系家族に生まれたヴァン・ビューレンは、建国初期にハドソン川渓谷での「アリストロ」の寡頭政治と政治腐敗をじかに体験したが、その経験こそがヴァン・ビューレンの政治信条の中核を形成したと、ブルック教授は革命後のローカルな政治状況の重要性を説く解釈を打ち出している。そうであるならば、われわれはヴァン・ビューレンと彼の政治信条を歴史的な文脈の中にいかに位置づけたらよいのだろうか、という疑問が湧く。彼は伝統的な価値観に縛られない新しいタイプの自由主義的な政治家だったのか。それとも、われわれはヴァン・ビューレンを古典的共和主義に厳密に忠実であろうとした、むしろ後ろ向きの政治家だったと理解すべきなのであろうか。ブルック教授の見解が正鵠を射ているならば、ヴァン・ビューレンに内在する二面性を、アメリカ史の文脈でどのように解釈すればよいのだろうか、ヴァン・ビューレンの再評価について今後さらなる議論の深化が期待される。

3. 近代的公共圏の創造におけるフリーメイソンの役割

アッシュベル・ストダード (Ashbel Stoddard) の『ガゼット (the Gazette)』に代表されるようにハドソン川岸の新興商業タウン一帯で急増した新聞と並んで、第2章でブルック教授は、建国間もないアメリカ合衆国の政治文化の大きな移行期にフリーメイソンが果たした重要な役割を強調している。この点は大変興味深く洞察力に富む議論であるが、評者には次のような疑問が残った。第一に、建国初期のメイソンの新しい支部の増加は、いったい何を意味するのだろうか。新共和国の創設と同時にアメリカの政治は急速に党派的な様相を帯び始めるが、新たなメイソン支部はその政治対立・緊張を和らげる役割を果たしたのか、あるいは、むしろそれらは結果的にハドソン川渓谷地域の政治闘争を激化させる働きをすることになったのだろうか。

フリーメイソンはもともと友愛精神を共有する啓蒙主義的な秘密結社であり、ゆえに非政治的で中立的な組織であることが求められた。また会員資格も限定的であり、概してコミュニティ内の上・中層部の「立派な (respectable)」な紳士たちで占められていた。ブルック教授は、革命後の移行期の代表的なメイソンしてリヴィングストン大荘園主でクレアモント在住のロバート・R・リヴィングストン (Robert R. Livingston) を挙げる。著者によれば、彼こそが慈愛と啓蒙精神に溢れた地方の典型的な貴族的指導者であり、90年代に広がったコロンビア郡の新興メイソンのネットワークは、ポスト革命世代の指導者に民主的な啓蒙を吹き込み、「デモ」と「アリストロ」の両極端の調和に努めたのであった。

ところが建国初期にはフェデラリスト派のエリートがしだいにメイソン支部を牛耳るようになると、地方政治における下からの民主主義的要求を抑え込むために彼らはこの結社を利用するようになった。1780年以降急増したメイソン支部 (ニューヨーク州では1780年から1801年の間にリヴィングストンはグランドマスターとして83の新たなロッジの認可に関与した、86) は、ローカルな政治指導者にとって非常に有用な組織となり、また90年代末のリパブリカン派の台頭に伴いフリーメイソン内部も急激に政治化したように思われる。第二の疑問として、このとき建国初期のフリーメイソンにいったい何が起こっていたのだろうか。ブルック教授は、ニューヨーク市のグランド・ロッジと新興のロッジ

の間で近代的な儀式と古代の儀式を巡る論争が生じ、その過程の中でニューヨーク市のグラント・ロッジはオルバニーなど北西部の新しいロッジへの影響力を失ったことを指摘しているが、メイソンは新設のロッジに多くの「新人」を取り込むことで民主化・分権化されたと解してよいのだろうか。結局フリーメイソンは、新しい「公共圏」の創出にどの程度決定的な役割を果たしたといえるのだろうか。

第三の疑問として、新たな政治文化の胎動へのフリーメイソンの貢献は、大西洋世界においてアメリカ特有の現象だったと考えてよいのだろうか。つまり、革命前後における合衆国の「公共圏」の変容に対してヨーロッパと比べて特筆すべきアメリカ的な現象が見られたのか、ニューヨーク州のメイソン・ロッジが果たした政治文化的な役割は、大西洋世界全般に当てはまると考えてよいのだろうか、これらの点について本書の中でもう少し踏み込んだ説明があれば読者にとってより説得的な議論となったであろう。⁵⁾

4. 重層的な「公共圏」の並存とその文化的意味

第3部「政治と排除」のなかでブルック教授は、19世紀の初めの政党政治の出現と女性、自由黒人、小作人の政治的排除と抵抗に焦点を当てている。「革命の帰結」の中で形成された新共和国の「公共圏」は、19世紀初めに「人種」とジェンダーに基づく境界線をより強固なものにした。なかでも1821年ニューヨーク州憲法会議における新たな投票権資格を巡る激しい議論は画期的な転換点となった。この会議でヴァン・ビューレンは「オルバニー・リージェンシー (Albany Regency)」と呼ばれることになる、自らの政治組織の基盤を拓げるために、参政権資格として(白人成人男子の)財産要件を不問にして、多くの小作人を含む白人有権者の票の取り込みを企てたが、他方で「人種」によらない普遍的な参政権には慎重な態度を示した。結局、自由黒人には参政権資格として250ドルもの高い財産要件を課すことで政治的妥協が成立し、1821年の州憲法の改正が行われた。つまり、政治参加の伝統的な財産要件は、「人種」に取って代わられたのである。さらに26年ニューヨーク州では兵役経験と納税要件が取り除かれ、すべての白人成人男子に普通選挙権が認められたが、自由黒人はこの恩恵からも除外されたので公的に政治問題を「審議する過程」から事実上締め出されたのである。黒人は今や『フリーダムズ・ジャーナル (*Freedom's Journal*, 1827-29)』紙のような彼ら自身の刊行物を通して自らの意見を表明するしか他に手だてがなかった。黒人初の新聞『フリーダムズ・ジャーナル』紙の創刊が翌27年9月だったことはこのことを如実に物語る。彼らは黒人独自の言論空間の中で自らの主張を広く読者に訴えるような「説得の場としての公共圏」を創ることを余儀なくされたのである。

ジェンダーもまた、公的領域と私的領域の境界線を分かち指標として機能した。女性は家庭の領域に彼女ら自身をとどめることが求められた一方で、政治と商取引は男性に属する領域と解されたのである。第8章においてブルック教授は3人の傑出した女性たちを取り上げ、多様な「公共圏」の出現とその脆さを例証する。マウント・レバノンのシェイカー

⁵⁾ 建国期のフリーメイソンに関しては、次の研究書が参考になる。Steven C. Bullock, *Revolutionary Brotherhood: Freemasonry and the Transformation of the American Social Order, 1730-1840* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996).

共同体で指導的な役割を果たしたルーシー・ライト (Lucy Wright) は、女性による政治支配の教義を鮮明にし、メンバーの獲得とシェイカー支部の西部への拡張を計画するが、男性を中心に内部から異議を唱える者が相次いだ。ライトの厳格な教義は、コミュニティの教育にも及び、ライトと彼女の信奉者が、当時広がりつつあった商業的な印刷文化の影響を、共同体から遮断しようと奮闘していた事例が紹介されている。

第二の事例として、ブルック教授は、裕福なりヴィングストン家で育てられたキャサリン・リヴィングストン (Catherine Livingston) の神秘的な回心体験とその文化的意味を考察する。キャサリンは30歳代初めにオランダ改革派教会の規律的な生活を嫌ってメソジスト派の教義に傾倒するようになり、彼女は当時精力的に活動していた巡回牧師フリーボーン・ギャレットソン (Freeborn Garrettson) に出会い、家族の猛反対を振り切って駆け落ちする。キャサリンは夫の伝道を援助しながら、同じような思いを抱く女性たちをつなぐ「福音派女性の通信ネットワーク」を構築し、このネットワークを基盤にして「聖なる婦人団体のサークル (circle of holy sisterhood)」を組織した。こうして「共和国の母性」を連想させる上・中流階級の婦人のための福音主義的な交流空間 (ある意味で一つの「公共圏」) を生み出していったプロセスが詳説されている。

第三の事例として、著者は、ハドソン川渓谷におけるクエーカー教徒の指導的な教育者ハナ・バーナード (Hannah Bernard) の教育観を考察する。ハナは、ダッチェス郡にクエーカー教徒寄宿学校の創設に尽力し、独特の宗教教育を実践するが、そこではとりわけ外部からのセンチメンタルで「有害な」商業文化の浸透に警戒し、生徒の読書や外界との通信を注意深く監視する方針を貫いた。後年、援助に値する貧困者の救済を主目的とした女性慈善協会の設立に尽力し、19世紀初頭にハドソン川渓谷女性慈善協会 (The Hudson Female Benevolent Society) の会長を務めるなど、自律的な「女性の領域」の形成に大きな影響を及ぼした。

これらの代表的な女性たちに共通に見られることは、彼女らが独自の「公共圏」を定義し創造することで商業化した市場経済の貪欲な諸力から逃れようとした懸命な努力であった。こうした興味深い事例からも明らかのように、われわれはハドソン川渓谷の婦人の間でもいくつかの重層的な「公共圏」が存在していた事実を知らされる。それでは、19世紀初頭の「公共圏」の複数の共存をわれわれはどのように理解すればよいのだろうか。合衆国では「公共圏」の参加資格と同様に「公共圏」の意味を巡る論争が1820年代にはいっそう先鋭化し、しばしば議論の中心を占めるようになった。ブルック教授が取り上げた事例は、「公共圏」を政治的な概念と文化的な概念の二つに分けて考える必要性を示唆しているのだろうか。初期アメリカ共和国の文化変容とシティズンシップの関係を分析するために、そもそも「公共圏」概念は、どの程度有用な手段として機能するのだろうか。本書の詳細でニュアンスに富んだ議論は、伝統的な政治史と文化史を融合させることで独立革命から「ジャクソンの時代」への大きな文化変容に関するより精緻で複雑な見取り図をわれわれに与えてくれる。

5. ローカル・ヒストリーの一般化の問題点

コロンビア郡は、オランダ系コミュニティや少数の大地主家族が支配するドイツ系荘園

タウン、ニューイングランドから移動してきた新しい移住者のコミュニティを含んでおり、民族的に多様な地域文化を構成していた。母国の言語に加えオランダやドイツから持ち込まれた特有の民族文化は頑強に根付き、新天地でもそうした文化的伝統は長らく保持された。だが、アメリカ独立革命以降ハドソン川渓谷の多くの民族的マイノリティは急速にイギリス化し、建国初期のコロンビア郡における保守的な政治基盤となったことを、ブルック教授は指摘している。この意味で、保守主義の擁護者として法曹の育成に尽力した元ロイヤリストのピーター・ヴァン・シャークの晩年の活動は、オランダ系コミュニティの保守的伝統を代弁していたといえる。

19世紀の最初の数十年間には、商業化した出版文化の台頭とステロ版印刷など技術革新に助けられて新しい近代的な「公共圏」が形成され、福音派の教義も西部へ急速に広がった。社会史家たちがこれまで指摘してきたように、より多く中産階級の女性たちが教会や社会改革運動において重要な役割を果たし始めたのもこの頃である。しかしながら、コロンビア郡とハドソン川渓谷は、「(福音派の伝道で) 焼き尽くされた地帯」として知られているニューヨーク西部の運河地域と違い、一般的には「女性の活動と改革への先導的役割の融合」を経験しなかったとして、ブルック教授はコロンビア郡での福音派の改革運動の重要性をやや低く評価しているように思われる(381)。仮に彼の観察が正しければ、コロンビア郡はきわめてユニークな地域だったということになる。そうであるならば、われわれは、ブルック教授の地域史的な研究から当時の政治文化的変容を一般化して考えることができるのだろうか。言い換えれば、彼が本書で示した解釈枠組みは、南部や西部などの別の地域にも適用可能なものとみなしてよいのだろうか、という疑問が依然として残る。

おわりに

本書のように複雑で洗練された研究書を包括的に書評することは、率直に言って評者の能力を超える。しかし、エリートに率いられた共和主義的政治から、「公開の審議」、「説得」、「人民の政治的同意」に基づく19世紀の新たな政治文化への移行と、政党システムを中心とした「積極的な自由主義政治」と「消極的な自由主義政治」の対立・競合に特徴づけられる参加型民主政治の台頭に関するブルック教授の洞察力と力強い議論は、まことに印象的なものである。終章でも1840年代に晩年のヴァン・ビューレン率いるフリーソイル党がハドソン川渓谷の長年疎外感に苛まれてきた小作農民から熱烈な支持を得た事実とその期待が裏切られた際の暴力への訴えなど、長期的視点から鮮やかに描かれており、まさに近年の社会史研究の真骨頂を発揮している。さらに特筆すべきは、「公共圏」と政治文化の変容過程について入手可能なあらゆる史料を綿密に統計分析し、かつ慎重な解釈を下している著者の真摯な研究姿勢には、評者としてただただ感服するしかない。

本書は、アメリカ建国期の政治や社会を専門に研究する者のみならず、広くアメリカの政治文化のルーツに関心を抱くすべての研究者にとって必読の書といってよい。大著ではあるが忍耐強く通読するならば、必ずや大いなる知的興奮と有用な知見が得られるであろうと評者は確信している。